



Norio Shiratori

● 特別インタビュー ●

情報処理学会、 これからの 50年

情報処理学会の白鳥則郎会長に、情報処理学会が今後どのように向かっていくのかについてお話を伺った。

3つの軸「多様性」「共生」「人間性」

— 将来の情報処理学会全国大会の方向性について、どのようにお考えでしょうか。

白鳥会長：私は、これからの50年を「多様性」「共生」「人間性」という3つの軸で考えていくことを提案しています。

たとえば、全国大会のあり方に関して、完成度の高い技術論文の発表だけでなく、アイデア段階のものを発表して意見や議論をするといった「多様性」を受け入れる形が、これからますます重要になってくると考えています。

それに関連して、ローカルとグローバルについても考えていく必要があります。オリジナリティの確保と世界への発信であれば、速報性などの観点から全国大会に英語のセッションを設けることは、非常に良い方法だと思っています。

— 全国大会を海外で行うというのはどうでしょうか。

白鳥会長：一部の合同研究会などを海外で開くことは考えています。全国大会はその次のステップですね。その前に、世界への窓口となる全国大会の英語セッションがあり、それを世界に発信できる環境を提供することが重要だと思います。

今、学会がすべきことは何か

— 最近、学生の理工学部や情報学部離れが起きているという話ですが、その理由は何でしょうか。

白鳥会長：この10年間の高校生や大学生は、生命や宇宙、ロボットというキーワードに夢や興味を感じています。当然、彼らはそのような技術を学べる学部を志望しますよね。

情報系の我々はそのような夢を作ることを怠ってきたと思っています。そこで私は、会長に就任した際に、明示的な夢のイメージを提示して、夢を共につくり、これを実現する技術を先導していくことが、学会の重要な役割の1つだと述べています。

— 情報処理の分野が宇宙や生命などのカテゴリに吸収される可能性はあるのでしょうか。

白鳥会長：インターネットを含めたITは、我々の生活のさまざまなところに浸透しています。空気や水に対して、我々は在ることを実感したり、ありがたいと感じたりする機会は少ないですよね。ITはそれと同じようになってきていると思います。小学生でも中学生でも高校生でも、携帯やパソコンに触れる時間が増えてきているけれども、それに夢を感じるかというと、あまりにも身近すぎて感じにくくなっているのです。

これは、実際に夢はあるけれども、それを明示的な形で提示することを、関係者が怠ってきたということだと思います。だからこそ、我々は情報処理に関する魅力作りや将来に対しての努力が必要であると思っています。

「共生」に根差したグローバリズムが本当のグローバリズム

-- 若い世代の方で、実力のある方が海外に出て行ってしまふことは、どのようにお考えでしょうか。

白鳥会長：日本では一度失敗したら、再挑戦するのが非常に難しいですね。海外では失敗を糧にして、次の成功を狙うことを考えるし、それが受け入れられる環境があります。

僕は、羽ばたきたい・挑戦したいと思う人を日本に無理に止めるよりは、羽ばたいてほしいと思っています。人間の意識が変わるには、10年20年では難しく、50年から100年がかかります。今は海外で能力を発揮してもらって、将来その人たちに日本に戻ってきてもらい、日本の環境が変化する速度をはやめてほしいと思っています。

また、社会というのは絶えず変わっていきます。学会にしても人間にしても、その変化に適応していく部分と残していく部分の両方が必要です。特に適応していく部分については、情報処理学会がリーダーシップを発揮していかなければなりません。

その中でも、私は日本のローカル文化というのを大事にすべきだと思います。グローバルが最初にあるのではなく、地域のコミュニティやローカルな文化が栄え豊かにならずして、真のグローバリズムはありえません。グローバルのために地域や個人が部品になるのは、決して正しい方向ではないと思っています。

つまり、2つ目の軸である「共生」に根差したグローバリズムが本当のグローバリズムであると考えています。共生を本当に実行するには、現在重視されている国益優先という考えを超えないといけません。

-- 共生という概念は、民間企業にとって難しい点もあるのではないのでしょうか。

白鳥会長：国益の前のステップが企業や組織体です。企業や組織を守る、良くするというはとても大切です。共生においては、それに加えて他の企業や組織も良くなるという視点をどのくらい持ち得るかが大切だと思います。

1人勝ちの極端な例が、効率至上主義の新自由主義です。効率を突き詰めていった結果、2008年にそれは崩壊しました。そこから得られた教訓は、「人間の欲望は歯止めがかからない」ということです。そして、国益をとことん突き詰め

て破綻しない限りは、国益を超えることは難しいかもしれません。国益優先に限界がきて、次の共生のステップに進むには、やはり50年から100年の時間がかかるでしょう。

さまざまな可能性をぶつけ合うことで新しいものが生まれる

-- 共生というゴールを実現するために必要な要素とは何でしょうか。

白鳥会長：NPOの活動を見ていると気づくのですが、自分1人では実現できないことも、100～200人の人が集まれば実現できることがありますよね。

それが3つ目の軸である「人間性」です。情報処理学会も高齢化社会に向き合うことが大切です。シニア層をどのように取り込んでいくのか、シニア層が喜び・生き生きと活動できる環境を提供する方策を考えねばなりません。

また、学会は40代よりも若い世代の人たち、つまり今ITの最前線で活躍している人たちを取り込むことに失敗しています。彼らが何を望んでいるのか、何を期待しているのか、我々はわからないわけです。それが企業の学会離れに関係していると思っています。

そこで、第1ステップとして、デジタルプラクティスを2月15日に創刊しました。今、ベンチャーや中小企業にとって学会は魅力がなく、役に立たないと言われます。つまり、中小企業の人たちが現場で参考になるような技術や、魅力を感じる内容に目を向けていく必要があります。

-- 学会誌や全国大会にはビジネスの種になることがたくさんあり、アピールすれば中小企業の技術系の会社は振り向くと思うのですが。



白鳥会長：全国大会に中小企業やベンチャー企業の視点を取り入れた特別セッションの企画を検討しています。これまではそのような視点がありませんでした。

理想的には学会の敷居を低くし、普通の会社で働く若手技術者がディスカッションできる現場のテーマや内容にも組み込まないと、本物ではないと思っています。今の全国大会はそのような方たちが議論に参加し、参考になるような内容になっていませんから。

多様性という観点で、基礎から応用、ヤング層からシニア層まで、大会においてお互いに短時間ですが、さまざまな可能性をぶつけ合うことで新しいものが生まれるきっかけになると思います。ディスカッションの後、興味が深まりさらに研究を続けるでしょうし、それが縁で連絡を取りやすい関係を築くことができますよね。これは非常に貴重な財産です。また、めったに会えない人と会うチャンスでもあります。そのような意味で全国大会は若い人たちにとって貴重な場であり、小さな発表だけでも大きなチャンスでもあると思います。

人間と情報環境が高度に 調和していくこと、つまり共生が大切

—50周年の節目をどのように捉えていますか。

白鳥会長：50周年という節目は非常に大事であると思っています。50周年を逃したら、長期的な視点を持ち出して議論する場や理由がなくなってしまうためです。これを機会に、みんなで情報処理という分野について、議論を深めていきたいと考えています。

—今後どのような変化が訪れるのでしょうか。

白鳥会長：まず、人間と情報環境が高度に調和していくこと、つまり共生が大切であると考えています。

これからの5年から10年で、インターネットやモバイルなどのユビキタス情報環境の世界をより高度にしていく必要があります。それを実現する新しい軸は、社会性（社会的現実感）と人間性だと私は考えています。ここで人間性とは広い意味で、感覚的現実感でありヒューマンインタフェースなども含む概念です。それらの軸に加えて、新たな軸を皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

共生の概念は、だれの心にもある

—今流行しているソーシャルネットワークや Twitter もその1つだとお考えでしょうか。

白鳥会長：そうですね。社会性と人間性の1つの例題が Twitter かもしれません。そういったことを手掛かりに、次のステップに必要な新しい軸を考えてかなければなりません。

—今の Twitter などでは実現が難しいのでしょうか。

白鳥会長：Twitter は共生という観点から考えると、言いたい放題で相手（みんな）が良くなるという視点が欠けていると思います。共生は「公（みんな）と私の調和」に価値を置いています。今後 Twitter も、自分だけでなく、みんな即ち周りのことや相手のことをどれだけ考えられるかという調和に価値を置く方向に進んでいくと思いますよ。社会主義の崩壊と2008年の市場原理主義の破綻から、両極端に走ることが駄目だということが、よくわかりましたからね。

—共生とはこれまでにない新しい概念なのでしょうか。

白鳥会長：昔の全国大会には共生という意識や考えがありました。それが、ITの利便性を享受するあまり自分中心となり、忘れてしまっているだけだと思います。公（みんな）と私の調和、つまり相手のことをどれだけ考えられるかという共生の概念は、本来だれの心にもあるのです。

その共生のパラダイムを技術の中で、つまり情報処理にかかわるみんなで作っていきたくて私は考えています。それを模範として、社会のパラダイムのあり方にインパクトを与える提言をしていくことが今後の学会の使命であると考えています。

—共生は今後注目のキーワードになりそうですね。ありがとうございました。

白鳥則郎 (Shiratori, Norio)

東北大学電気通信研究所 客員教授・名誉教授／公立はこだて未来大学 理事。1977年東北大学大学院博士課程修了。1984年同大電気通信研究所助教授、1990年同大情報工学科教授、1993年同大電気通信研究所教授。2010年同大客員教授・名誉教授／公立はこだて未来大学 理事。本会副会長(2004-05年度)、理事(1996-97年度)、研究会主査。本会フェロー(1999年度)、功績賞(2007年度)、25周年記念論文賞。本会主催国際会議 General Chair, IEEEフェロー。人と情報環境の共生の研究に従事。